

# Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／武田 易

## 女性だけの空間で 女性のライフステージに 必要とされるセンスが身につく

飯謙  
学長  
神戸女学院大学



### 神

戸女学院大学は2人の女性宣教師によって設立されました。

当時、十分な教育を受けられずにいた日本の女性に対し、指示されるままに行動するのではなく、自分自身として、言い換えれば「解放された人間」として生きることを教えたのです。それが深い意味で「コミュニケーション力のある、他者に開かれた人のあり方です。本学のミッションステートメントに「感性の高い人格への成長」と書かれていますが、130数年来、受け継がれてきた本学の精神的な伝統を表す言葉だと思っています。

本学が語学教育に力をいれるのも、相互理解を育む学問だからです。例えば、日本語の「ありがとう」は、「滅多にな

い」という意味ですが、英語の Thank は、「あなたのことを思う」という意味の単語から派生したと言われています。外国語を学ぶということは、異質な思考を学ぶことでもあるのです。学修プログラムを幅を広げていこうと模索しているのも、異質なものをつないでいこうという考え方が根底にあります。

ミッションステートメントにはまた、「置かれた場で、利害を超え、自らの役割を感知し」とあります。置かれた場、すなわち偶発的な出あいのなかで、思いがけない発見をし、それを能動的な方向へ変化していく。女性のライフステージにおいては、予定・予測外の決断を迫られることもあるでしょう。意図しない場面でも、悲しみが孤独を深めるのではなく、

誠実に自分の役割を発見するセンスを磨いてほしいのです。女性だけの解放された空間のなか、自然とそうしたものがないと身につく空気がここには流れています。

従来の英文学科の枠を広げたグローバル・スタディーズコースほか、学びのシステムは進化させていますが、次々と新しいことを打ちだしているわけではありません。むしろ、これまで続けてきた教育を大切に継承しているという感じですが、幅広い人格形成を目指すリベラルアーツカレッジとして、いたずらに数値目標を立てることもなければ、画的な目標設定もしない。それぞれの力に応じた成長を遂げることが大切だと考えているからです。それでいて多くの学生が、それぞれに課せられたハードルを大きく越えていく。他者の成長を願いながら、気づけば自分も成長している。小規模大学だからこそ維持できる学風です。無責任なことはいえませんが、教育とは、本来そういうものだと思っています。

ここにいと教員も変わるんです。プレッシャーのなかで生きてきた人たちが解放されていく。学長としてそうした良さを広く伝えたいのですが、容易なことではありません。それに、そうしたことにあまり執着しないのも神戸女学院らしさのような気がしています。

【学長プロフィール】いい・けん●1955年生まれ。明治学院大学社会学部卒業後、同志社大学神学部、同大学院博士課程前・後期課程、スイス・バーゼル大学神学部で学ぶ。83年神戸女学院大学。文学部教授。2009年より現職。専門はキリスト教学、旧約聖書学。

【大学プロフィール】1875年開校の女子寄宿学校「女学校」を源流に、1948年新制女子大学「神戸女学院大学」として発足。文学部(英文学科、総合文化学科)、音楽学部(音楽学科)、人間科学部(心理・行動科学科、環境・バイオサイエンス学科)の3学部5学科。